

## さくら猫（「猫」その2）

根来 濤子

縞虎の猫「グレイ」と友達になって半年が過ぎた。グレイは偶然道で出会った成猫だが、親し気に私の後を付いてきたので家に入れておやつをやり、仲良しになったことは、「みなせ文芸91号」に「猫」という題でエッセイを書いた。これは「猫」の続編である。

古びてはいるが、首輪をつけているグレイは本当に人懐っこく、いつも足元にすりすりしてくる。抱いてあげると「ゴロゴロ」と喜びを惜しげもなく表現する。どこの飼い猫だろうとおもいながら、その愛くるしさに負け、つい、私も撫でたり抱いたり、家にかけて猫用のおやつを与えたり、精いっぱい愛情をかける羽目になった。グレイは我が家に夕方ごろ訪ねてくることが多かったので、私は外出した時もそんな時間になるとなんとなくそわそわして帰宅を急いだ。もちろん家猫として飼っているわけではないので責任はないのだが、グレイの訪問がとてもうれしいのだ。

私はオス猫のグレイと友情を育んでいると思ってるが、グレイはどうだろう。おやつをくれる都合のい

いおばさんぐらいにしか思っていないのかもしれない。縄張り意識の強いといわれる猫の習性で、我が家を方々歩き回っては、いかにも納得したといわんばかりに帰っていくのである。出会った当時、寒い季節だったので、グレイは居間のソファで寝そべっていたが、真夏の暑苦しいこのごろは、戸外のほうが、気分がいいようで、おやつを食べ終わるとさっさと出ていく。一言位挨拶があつてしかるべきだと思うのだが、そんな気遣いは全くない。抱かれはするがすぐに下りたがる。おやつメニューを考えて、あれこれ工夫している私の誠意は伝わっているのだろうか。そもそも飼う主はどこだろう。どうしても知りたいという思いがたよくなつていった。

東京に住む娘一家は私に負けない動物好きである。今春、大学を卒業してITの企業に就職したばかりの、東京に住む孫も「猫カッフェ」に時々出かけるほどの猫好きである。男性なのだが、猫好きに性差はないようだ。マンション暮らしで動物は飼えない。日ごろ、忙しいとか、コロナの自粛問題など口実をつくつて、めったに、関東の西のはずれにある我が家を訪ねてこない孫が、猫が時々遊びに来ると伝えると、一週間ほどして、さっそくやってきた。お土産は猫缶。ペット

シヨップで一番高価な値段のものを買ったという。家に着くと、そわそわして「おばあちゃん、猫はまだ？」と落ち着きがない。玄関をすこし開けておいたらいつものように夕方近く、大型の身体を揺らせながら、グレイがやってきた。人見知りをしないグレイは堂々として王様のようなのである。孫は大興奮で早速猫缶をあたえた。

人間の缶詰よりも高価な御馳走である。グレイは我々が見守る中、べちゃべちゃと食べ始めた。「かわいいね」を連発しながら夢中でスマホで写真をとりまくる孫。グレイが食べる姿をみて大喜びなのだ。頭をなでたり、喉を撫でてあげたり、ご満悦である。大の男が、と苦笑するが、内田百閒の小説『ノラヤ』の、百閒の溺愛ぶりの例もある。猫好きの人間をこんなにも癒すものかと、私も同じでありながらおもわず同調してしまった。孫は「また来るね」とご機嫌で帰っていた。

次は孫娘の出番であった。社会人で会社勤めをしている彼女もハムスターに始まってインコなどを飼っていたが、今は「らてまる」と名付けたウサギである。耳が赤くて長くて、というイメージとは程遠く、毛がふさふさと目を覆い、非常に特殊な容貌をしているが、

ウサギはおとなしくて鳴くことはないし、マンシオンでも同居が容認されているらしい。彼女は小動物について詳しいがグレイをみて、「目が大きいね」といった。テレビ番組、岩合光昭の「世界猫歩き」でも様々な猫の容貌をみるが、確かに若干の差はあるようだ。平凡な雑種とはいえ、グレイの身体は縞模様の部分と白色の配合は絶妙に整っていて毛並みはつややか、大柄ではあるが、お腹も引き締まって中肉中背、顎は引き締まり何よりも鼻筋が整っている。美貌なのだ。年齢は定かではないが青春真っ盛りであろう。時として、歩いているかと思うと突然パタッと倒れて横になりそのまま寝てしまう。両耳を立て、前足をきちんと揃えて、毅然たる態度で正座している姿はあまり見かけない。猫でありながらいつも寝そべっていて自堕落だ。熟睡すると猫にあるまじき格好でお腹を丸出しにしている。

さらに彼女はいった。

「グレイは男の子ね」

「そうだと思う、どうしてわかるの」

「耳がカットされている。去勢手術をしている証よ。」

右の耳のカットは男の子なの」。

確かにグレイの右の耳の先端がVの字型に切れているのはもちろん気づいていた。グレイは動作が緩慢で、

のっそりとした動作をしているので、子猫のころ、何処かの猫とけんかをして噛み切られたのかとばかり思っていた。「へえ、飼い主さんが手術をしてあげたのかしたね」

「グレイは地域猫かもよ」。さりげなく孫の言う「地域猫」とはどんなものか、会話はそれで終わってしまった。美男のグレイはわが家族にモテモテで、大歓迎され、それが伝わったのか全員に、平等にすりすりして出ていった。

手術をしている「地域猫」と孫の言ったことが気になった。猫は繁殖力が旺盛だと聞いたことがある。不要な猫を増やさないために飼い主の責任で去勢、不妊手術するのは当然のことだと思う。それならどうしてわざわざ耳をカットする必要があるのか、不思議に思い、インターネットで「地域猫」を検索してみても、私にとっては衝撃的な事を知った。

耳がカットされている猫は「世話をする人はいるが、飼い主のいない猫のこと」だという。不思議な表現である。もともとはノラ猫、捨て猫だったものを、地域の動物愛護ボランティア住民の協力で、飼い主ではないが、その地域に合ったような方法で飼育を明確にし、動物基金に申請をして協力病院で去勢、不妊手術をし、

毎日の食事を与えて、管理されている猫のことを「地域猫」と言うことだ。ノラ猫として再び捕獲されるこ

とのないように、手術済みという証に耳をカットしているという仕組みを知った。カットされた耳が、さくらの花びらのようなので、そのような猫のことを「さくら猫」と呼ぶらしい。女の子は左耳を、男の子は右耳をカットするという。

猫を愛する人たちの心情が伝わってくるような美しい呼び名だと思う。

私は神奈川県西部に位置する秦野市の住人である。秦野市はどうなっているのか。

さらに絞って秦野市の取り組みを検索した。その結



果次のようなことが分かった。

「秦野市猫との暮らしを考える会」という見出しに続いて次ような記述がある。

「秦野市を中心に飼い主のいない猫たちの命を排除することなく行政、地域住民のみなさま、ボランティアの協力でTNR活動を進めている民間ボランティアグループ」。

更に「地域猫」についての説明に続いて、「避妊、去勢によって一代限りの命となった猫たちを地域住民が容認し、世話をしながら見守る団体。飼い猫の寿命が15年以上であるのにたいして、屋外でのきびしい環境の中を懸命に生きる猫たちの寿命は3年から5年といわれている。この短い命をやさしく見守り、地域の方々と、飼い主のいない猫たちが穏やかに共生し、これ以上猫を増やさない取り組みのことを「地域猫活動、TNR」であると述べている。「Tは捕獲、Nは不妊、去勢、Rは元に戻す」という説明である。TNRが「地域猫活動」の基礎になっていることを初めて知った。秦野市の会の会員は13名。それぞれ仕事を持ち、働きながらこの会を運営しているとのこと。会代表〇〇と名前が明記してあった。

信じがたいことだが、グレイは「さくら猫、地域猫」

だったのか。おどおどしない、悪びれたりしない態度でわが意を押し通すグレイは、飼い猫としての尊厳を持つている。しかし、夜に、我が家のテラスに置いてある木製の椅子で寝ていることがあった。窮屈そうに丸まっているので椅子をもう一つ増やして、毛布をひいてあげた。夜中に目覚めたときに覗いてみて、グレイが寝ていると、「お家に帰りなさいよ」と言っていて、煮干しを上げたりした。グレイの宿は決まっていなかったのか。

グレイは子猫の時にすてられ、幸運にもボランティアの人たちに拾われ、その優しい性質から動物病院につれていかれ、去勢手術を受け、耳をカットされた「さくら猫」なのだ。野良猫の命とか、繁殖による弊害などに想いを馳せることなく、ただ自分の感情だけで猫をかわいがっていたこと、秦野市に住んで50年にもなるのに、近隣の人たちに対して何の関心もなく、隣組の行事に参加することもなく生きてきた

まさにエゴだけで生活してきたことを、今更のように、大いに反省した。私はもうグレイの責任ある飼い主になれないと思う。外出することが多いし、第一グレイと私の寿命の長さの問題もある。いつ何があつて

もおかしくない私の老後である。

福島の原因事故で迷子になった犬や猫を保護している横浜の団体が、里親を募集していることを聞いて私の友人が犬を引き取りたいと思いい、その場所まで出かけたが、犬を戸外で飼いたいという希望を申し出たら、許可されなかったと話していた。庭が広いことを説明しても許可されなかったという。厳しい条件が課せられているのだ。命を預かるということは大変な責任を持つことになる。私はもう無力なのであるうか。

グレイは地域の不特定の人達に愛され、のびのびと生きているようだ。今更、窮屈な特定の家庭に縛られることは不本意かもしれない。私は「地域猫」としてのグレイができるだけ快適に暮らせるように私にできることをしていきたいと思っている。

秦野市の「猫との暮らしを考える会」の会員は13人いるという。グレイが我が家を縄張りに行っているといることは、会員の誰かが、近所に住んでいてグレイの世話をしているということである。グレイは我が家の裏庭のほうからやってくるようである。グレイに首輪をつけてあげて、保護している人には是非会いたいと言う思いに駆られている。

(2021年 8月)

\*\*\* \*\*

グレイは「さくら猫」ではなかった。グレイは、れつきとした飼い猫であった。とうとう飼い主が判明した。

9月下旬の某日、日増しに日の短くなるころ、外出が思いがけなく手間どって、帰宅が遅くなり、グレイが待っているのではと大急ぎで自宅の前まで来たとき、「ニヤーン」とあいさつして、玄関の前に行儀よくお座りをしている。辺りはもう暗い。こんな時間まで待っていてくれたのかと「ごめんなさい」と謝りながらバッグからとりあえず煮干しを出していると、目のまえに一台の車が止まって中年の夫婦らしい男女が下りてきた。知り合いではない。不審に思っているとご主人らしき人がいきなり、「あ、これはうちのシマだ」という。きよとんとしている。「我が家の飼い猫です。青い首輪は私がつけたものです。しばらく前から行方不明になり、どこかで交通事故にあったのかと心配していたら、最近ひよっこり帰ってきたんです。ああ、無事だったんだとホッとしていたら、またいなくなつた、やせてもいないし毛並みも艶々している。きつと

この近所の誰かが世話をしてくれているに違いないと気づき、ときどき車で探しまわっていました。あなたが面倒を見てくれているのですか」という。

「そうでしたか、とても可愛い猫だったから、でも飼い主の方がわかってほっとしました」。思いがけない展



開に驚いたり、喜

んだり。車からおりたつた飼い主は私の住む秦野市でも有名なお蕎麦屋さんの御夫婦だっ

た。市内の自家の畑で蕎麦を栽培してそば粉を製麺し、純秦野産の蕎麦を提供してくれて大変に美味であると

評判の有名な高級

店である。店舗は2軒あり、私の家から5分ほどの所には製麺工場があつて隣接して一つの店舗があり、蕎麦好きの娘一家と何度か食事をしたこともある。

店では、オスとメスの2匹の猫を飼っていて、メス

のほうは今も家にいるが、オスの「シマ」が家出をして心配していたが、お宅で可愛がつてくれていたんですか、と笑顔をみせた。「シマ、シマ」と呼んだが素知らぬ顔で座っている。日の暮れた道の真ん中で私たちは「グレイ」ならぬ「シマ」の話題に沸いた。

そうか、グレイは蕎麦店の愛猫「シマ」だったのか。

ここ半年ほどグレイと付き合つて疑問に思つていた身元がはつきりして安心すると同時に、一抹の寂しさが湧いてきた。そんな様子を察したのか、二人は「どうかこれからもシマをよろしくお願いします」とにこやかに挨拶をして去つていった。

「グレイ、どうしてあんなやさしい飼い主さんに心配をかけて家出なんかしたの」と問いかける。グレイは関係ありません、と相変わらずそっぽを向いている。

グレイはある日突然私の前から去つていく日が来るかもしれない。覚悟が必要である。

まことに、犬は所有することができるが、猫はエサをあげることしかできないという猫の写真家岩合光昭の言葉を痛感した。

(2021年 9月)